

## 保井 志之 D.C.

こうして1994年6月にパーマー・カイロプラクティック大学を卒業し、D.Cの学位を取得した私は、帰国して福岡市で治療院を開くことにしました。そして、治療院を開いたばかりの頃は、アメリカで習得

してきたさまざまなテクニクを試み

ることに熱中しました。手技による脊椎の矯正はもちろん、四肢の矯正、さらには頭蓋骨矯正など、あらゆる関節に手による直接の矯正を試しました。しかし、手による矯

正というのは、慣れてしまえばさほど難しい技術ではなくなり、2年程経つと、矯正技術そのものは、私にとってはあまり重要なことではなくなっていました。

そのかわりに私の前に立ち

## (5) カイロプラクティックとは何か

ことが治療だと思ひ込んでいたと言えます。構造的異常が病的な状態をもたらしているというわけで、まさに機械論的な思考をしていたのです。

私がここで言っている機械論的な思考とは、人体を機械仕掛けのロボットのように捉える考え方のことです。一般的にはこの機械論に沿った考え方で患者さんに説明すると、単純に「背骨がズレてい

るから、あるいは歪んでいるから腰痛が生じているのですよ」いうことになります。しかし、臨床の経験を積んでくると、「これでいいのだろうか」という疑問や矛盾が生じてき

て、様々な因果関係が、機械論的な思考では説明できないことに気づいてきたのです。

カイロプラクティックで

は、脊椎やその他の関節部のどこに「サブラクセーション」

があるかを正確に検出することが診断の第1目的となつています。このサブラクセーションとは、カイロプラクティックを教える大学や、カイロプラクターの集まりである協会などによつてニュアンスが異なりますが、簡単に言えば、神経の働きに障害を起ささせる部位であると言えるでしょう。最近では、その神経学的変調は神経関節機能障害とも呼ばれています。

(次号に続く)

### 【前回記事の訂正】

(4段8行目) パーマー大学では、

(誤) 7学期(3年4カ月)

(正) 10学期(3年4カ月)

### 【お知らせ】

弊社ホームページに、「カイロプラクター列伝 番外編」として、保井D.Cの米国パーマー留学時代のエピソードを掲載しています。あわせてお楽しみください。



留学当時の保井D.C.